

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	役割喪失後の生活再建を支援する ～作業療法士の立場から～
演者名	久米紘恵 1) 松崎美和 1) 永井康徳 2)
所属	1) 訪問看護ステーションコスモス 2) 医療法人ゆうの森たんぼぼクリニック

目的

高齢者が在宅生活を送っていると、遂行機能低下や外的環境の変化で従事していた活動が困難となっていく。役割を喪失したとしてもその後の生活を充実させることを目標に作業療法(以下 OT)の専門性を生かした取り組みを模索している。今回、患家の台所での実動作とコミュニケーションを通して、調理動作を主婦の仕事から自分の余暇活動に転換することができたので報告する。尚、作業評価・介入は「人間作業モデル」を参考にしている。

実践内容・効果

A 氏、80 歳、女性。18年前に脳梗塞を発症し左片麻痺となるも、一人で家事を担ってきた。夫の死後、家庭内の役割を喪失し「何もする気がしない」という発言が増えた。同時に発症前に作っていた「ロールキャベツがまた作りたい」という発言が聞かれたため、台所での調理訓練を導入した。

なつかしい自分の料理を目の前にした時、「両親は人に料理をふるまっていた。」「母の手伝いをし喜んでもらった」という幼少期のプラスの考えや感情が出てきた。よって、OT での調理動作は、近所の娘さんや友人に食べてもらえる量を作り、人にふるまう料理作りの機会として継続した。同時に家事を一人でこなさざるを得なかった外的環境要因、片手料理技能への自己認識の低さなどが分かり、肯定的な受容に向けて毎回コミュニケーションを図った。

結果、自分をほめる言葉が表出されるようになり、調理が楽しみの時間となった。

考察

A 氏は、幼少期の経験を経て「人にふるまうことが自分の喜びになる」という信念を持っていた。再獲得した調理動作は楽しみと喜びの余暇活動となり、自己肯定感を認識できる作業であったため、生活の質を上げるものとなった。

結論

在宅では、生活物語の構成と語りにより耳を傾け時間をかけて肯定的に受け止められる関わりができる。その人の信念を表現する作業を生活の中に再構築することができる。これからも家だからこそ触れられるものをキャッチし、質の高い時間を作っていきたい。